

石清水八幡宮 護国寺跡 現地説明会 資料

調査地	: 京都府八幡市八幡高坊 30 番地
調査原因	: 保存目的の範囲確認調査
調査面積	: 140 m ²
調査期間	: 平成 22 年 9 月 6 日～平成 22 年 12 月 15 日
調査機関	: 八幡市教育委員会 (文化財保護課 文化財保護係)

(1) 石清水八幡宮 護国寺について

石清水八幡宮 護国寺とは 石清水八幡宮は、貞観元年(859)に奈良・大安寺の僧侶であった行教が、大分県の宇佐八幡宮から、当時「八幡大菩薩」と称された神を、男山の峯に勧請したのが始まりです。貞観2年には朝廷によって社殿が整えられますが、本殿に次いで造られた古い仏堂が護国寺です。当初から本殿の位置する尾根筋より東に下がった山の中腹にありました。

八幡宮に伝わる古文書には、石清水寺という山寺が遷座以前からあり、その東面の堂を南面に改めて護国寺としたとの記述も見られます。本殿より古い石清水寺の存在は未確認ですが、神仏習合の宮寺として出発した石清水の成立当初から、護国寺は、本殿と一体で石清水八幡宮寺を構成していました。重要文化財の石清水遷座縁起も、正式名は『石清水八幡宮護国寺略記』とあります。石清水の全山を治めた長官は護国寺の別当であり、政令はすべて護国寺から出されていました。

本尊は薬師如来、康和5年(1103)には太宰権帥の大江匡房から十二神将を寄進されました。

中世の護国寺 嘉暦元年(1326)9月17日に、山裾の高橋にあった家からの失火が燃え移り炎上しますが、すぐさま再建に着手されます。建武元年(1334)9月の造立供養では、後醍醐天皇が臨席し、真言宗の東寺長者・道意が導師を勤め、足利尊氏、楠木正成、名和長年といった名だたる武将が警護を行い、盛大に行われました。ところが戦国の世に入ると、明応3年(1494)の火災で焼亡した後は、長く再建されませんでした。

江戸時代の護国寺 延宝7年(1679)の放生会の復興に伴い、護国寺仮御堂(薬師堂)が造られます。仮といえども桁行6間、梁間4間の立派な仏堂で、江戸時代の様々な絵図にその様子が描かれています。江戸時代後期、文化元年(1804)に幕府から修理料が寄進されたのを契機に、文化9年には本殿やその周囲の撰末社、大塔、宝塔院、数年後には山腹の石清水社など、大規模な修理が行われ、護国寺も文化13年(1816)に再興されます。このときの様子を伝える詳しい史料は現存していませんが、幕末に描かれた絵図によると、中世の護国寺を髣髴とさせる建物であったようです。

明治の廃仏毀釈 明治維新直後、神仏分離令によって、石清水境内のさまざまな仏教にまつわるもの同様に、護国寺も廃されます。その部材は720両で売却されたとの記録があります。本尊の薬師如来と十二神将は、淡路島の東山寺に移され重要文化財として現存しています。

指図と絵図 護国寺は、神仏分離令で失われたさまざまな建物のうち、鎌倉時代の古い指図(「石清水八幡宮御指図」(『石清水八幡宮史料叢書』五)が残る稀少な例です。これによると、南面し、東西柱間八間、南北七間(東の一間半の建出しを含めると八間)の本堂と、南に礼堂を備えた大規模な仏堂です。この構造は、室町時代に描かれた社頭図などの絵図と符合しています。本堂の中央には須弥壇があり、薬師如来と八幡大菩薩が祀られ、その前面に十二神将が並んでいます。本堂は鎌倉時代は土間で、礼堂は板張りであったようです。